

# 留学生はどうして日本人の友だちができないか

留学生センター 大 嶋 眞 紀

このようなテーマで「日本事情」の授業を行うことは一般的ではないが、本稿では平成13年後期にこのテーマで行った日本事情の授業の一端を報告したいと考える。

その理由はいくつかあるが、まず第一に授業のテーマを設定する際に留学生の側からもっとも切迫した課題であるという提案があったためだ。さらに実際に行ってみると、日本人や日本の社会についての様々な側面が浮き彫りにされ、「日本事情」の授業として一定の意味づけが可能であると考えたためである。そして最後に、留学生を担当する教師として、このテーマはさらに継続的な考察が必要な領域であり、日本事情や異文化理解の一つの重要な切り口なのではないかと考え、執筆した次第である。

## 1. はじめに

留学生の抱く大きな不満、それは日本人の友だちがなかなかできないということだ。来日して日が浅かったり、日本語があまりうまくない時期はもちろんのこと、かなり年月を置いても日本語がすっかり上手になってからも、むしろ日本滞在が長くなればなるほど、日本人とつきあうことの難しさを口にする留学生は少なくないし、そのことは文献でも指摘されている。<sup>(注1)</sup>

筆者の担当する日本事情のクラスでも日本文化とは何かという議論をすすめる過程でその問題はただちに浮上してきた。留学生が日本の文化について考えるとき、彼らの視野にまず入ってくるのは日々、授業をともにする日本人学生の姿である。

留学生に言わせると、日本人学生は留学生とは異なり、生活のためにアルバイトをすることはあまりない。生活全体に余裕がある。そのせいかファッションなども大変凝っていて、お金もかけている。彼らの話題は遊ぶこと、旅行に行くことなど楽しむことが多い。自分たちのきりつめた生活スタイルと異なるせいか、話題が合わない。また留学生の目には、日本人学生は親のすねをかじり、授業もあまりまじめに受けず、甘えていると映る。

これほどに距離があると友だちになることを期待する方がおかしいと考えられないこともない。しかし日本人にもいろいろいる。外国や外国人のものの考え方に本当に興味を持っている学生や、普通の日本人学生を冷ややかに眺めている学生もいる。そういう学生との接点はないのか。また一見距離はあっても、ごく普通の同世代の日本人学生と本当に接点は何もないのか。

そういった点を確かめ、また友だちというキーワードから日本の社会と文化を捉える切り口がつかめるのではないかと考え、このトピックを一つの課題学習としてとりあげることにした。その点について、留学生もまた大いに期待するものがあつたとみえ、一にも二にもなく賛同を得た次第だ。こうして「留学生はどうして日本人の友だちができないか」は学期後半の取り組み課題として採用

された。本稿ではその過程を追って、明らかになった点や考察を深めた点を、課題学習の手法とともに報告したいと考える。

なお、ここで筆者が課題学習と呼んでいる手法はいわゆるプロジェクト・ワークなどとは異なり、学習者全員が協力して何か一つのものを制作するといった目標は持っていない。それよりはむしろ、特定のテーマについて、様々な手法で考察を深め、各人が自分の問題をみつけ、その解決法を模索し、その結果をレポートにまとめ、教師がそれを評価するという伝統的な手法に従っている。その過程で討論を行ったり、必要があれば調査なども行い、その結果を口頭発表するなどの学習者を主体とする活動も含まないわけではないが、全体としては教師主導型の授業である。詳細については「3. 課題学習のプロセス」をご笑覧いただきたい。

## 2. クラスの構成と課題学習の全体像

クラスの構成は中国13、台湾1、韓国4、オーストラリア2、マレーシア2、ベトナム、スイス、インド各1、合計25人の学部1年後期日本事情のクラスで、日本語能力は一級合格者を半数以上含む上級者のみである。

週1回90分授業、15週で2単位取得できる正規科目で、課題学習に費やす時間は90分のうち、30分～60分、残りの時間は日本人とどのようにコミュニケーションをとるかなどについてのケース・スタディーや講読、四季折々の生活スタイルの紹介などを行っている。また学期前半と後半で異なる課題を取りあげ、約5～7週で1ラウンド終える形をとる。今回の課題は学期後半の課題である。

はじめに課題学習の全体計画を筆者が以下の通りに作成し、学習者に示した。具体的な内容が未定の場合は、学習者の問題意識や日本語能力を見きわめながら選択していくとして学習者にもそのように告げた。実際の経過はこの計画通りにはいかず、かなり軌道修正していることは「3. 課題学習のプロセス」に記述した通りである。

課題学習の全体計画	具体的な内容
1 ブレイン・ストーミング	日本人と友だちになるのは難しいかどうかについて話し合う。
2 講義	ブレイン・ストーミングで提起された日本人との友だち作りの難しさという問題を、異文化への適応の諸段階の理論、また人間関係の発展段階の理論などからめて講義する。
3 VTR視聴とクラス討論	VTR「留学生ダレスとラーマン」（製作：NHK・国際交流基金）視聴ののち、クラス討論「本当の友人とは？」を行う。
4 文献講読 1	「日本事情」講義を通した国際理解教育（九州大学高松里）より抜粋。この論文では、日本人学生が留学生をどう見ているかについて様々な意見が書かれている。日本人の側の視点も知ることで、自分たちのコミュニケーションのあり方を考える。
5 課題作文 1 提出	友だち作り－自分はどんな問題を抱えているか－を書く。
6 グループ討論	みんなの問題を表にまとめて、グループ討論を行い、問題ごとの解決方法を考える。
7 文献講読 2	土居健郎「甘えの構造」より「内と外」
8 クラス討論	みんなの解決方法を表にしてクラス全体で討論。
9 課題作文 2 提出	冬休みにその解決方法を実行する。その結果を課題作文 2 として提出。
10 読書課題	友人論を読み、課題作文 2 に反映させる。友人論リストは教師が作成。
11 クラス討論	課題学習全体を通じて自分が到達した考えを発表し、討論する。



### 3. 課題学習のプロセス

#### 3-1 ブレイン・ストーミング

どのようなトピックを扱う場合でも、学習者の立っている地点を明確にするため、またその地点で問題をどのように捉えているかを知るために、ブレイン・ストーミングを行う。課題学習1回目はまず「日本人と友だちになるのは難しいか」というテーマでブレイン・ストーミングを行った。

出された意見は以下のようなものだ。(記述については筆者による日本語の修正を含む)

- ・あるグループの女子学生ととてもいい友達になれたと思った。ところがそれがピークに達した頃、その女子学生たちは次第によそよそしくなっていた。自分にはいまだその理由がよくわからない。(中国・女)
- ・自分も同じような体験をした。ただ夏休みをはさんでいて、離れていたせいかもしれないと思ったけれども、同国人とはそんなことはないのでやっぱり変な気がする。(台湾・女)
- ・しばらくつきあっているうちに、日本人が自分とつきあうのは自分がスイス人であるためとわかった。もしスイス人でないなら友だちにはならなかったかもしれない。(スイス・女)
- ・第二外国語が中国語だからというのが相手のつきあう理由だ。(中国・男)
- ・自分もいったん冷却期に入ったけれど、今はまた持ち直してきている。そういう時期があるのではないか。(オーストラリア・女)

上のブレイン・ストーミングでは特に第二外国語が中国語だからなどという語学上の目的で近づいてくる日本人が多いという意見に大半が大きく頷く。しかし日本人が離れていくのはどうしてかという点にまだ全員の討論は深く突っ込んでいく段階にはない。その日はこの20分程度のブレイン・ストーミングにとどめ、2回目の授業にこの課題を持ち越した。

#### 3-2 講義

前回のブレイン・ストーミングを受け、この回では友だちづくりについて、カルチャーショック・サイクルと人間関係論の観点から、一定の枠作りのための講義を行った。まずはじめに Kohls によるカルチャー・ショック・サイクルを示し<sup>(注3)</sup>、いわゆる旅行者段階を経て、至福期、それに続く下降曲線を示し、前回意見の出た友だちとの冷却期をどう捉えることができるかについて、筆者自身の考え方を示す。すなわち日本人学生とはじめて出会った時、相手が外国人という新鮮さもあり、友人関係は旅行者段階から至福期へと向かう。けれどもピークを過ぎると、相手との関係が単なる物珍しさから成立していたということに気づきはじめ、日本人学生の方がひとまず引きはじめる。それを留学生は急な冷却という風に捉えるのではないかというような問いかけをする。ただし、この分析はあくまで一つの仮説であり、また、このカルチャーショックサイクルも一つのモデルにすぎないこと、また自分の経験をどう位置づけるかは各自が考えるべきことであるという指示も合わせて行った。

次に人間関係論の観点から、相手との関係作りをどうモデル化できるかという S.A.Beebeらによ

る一つの試論を紹介した。<sup>(注4)</sup> 以下の図を板書するとともに、自分の体験などもまじえて、人間関係の発展段階について講義を行った。板書した図を熱心にノートに書き写す姿が多かった。二つの講義に費やした時間は合わせて約三十分である。

〔人間関係発展段階モデル〕（原著は英文のため、筆者が和訳）

親密化	→	→	→
関係模索	↑		
関係開始	↑		
関係開始以前・認知	↑		
関係上昇			
関係下降	↓		
葛藤	↓		
関係弱化	↓		
別離	↓		
別離後の関係保持	↓		

### 3-3 ビデオ視聴

課題学習3回目はビデオの視聴を通じ、本当の友人とはどんな友人か、どんな条件があるか、また友人には何を期待するかなどということについてビデオ視聴のあと、感想もまじえて討論を行った。

使用したビデオは国際交流基金の「留学生ダレスとラーマン」。<sup>(注5)</sup> 約二十分程度のドキュメンタリータッチの編集ビデオである。東京の私大に通う二人の留学生の日常生活を描いた何の変哲もないビデオだが、留学生はこちらが予想もしないところで笑う。例えばコインランドリーで留学生が洗濯物を洗濯機に入れ、洗剤をふり注ぐ場面で一斉に笑いが起こった。あとで聞いてみると、コインランドリーの洗剤は無料だから、留学生はいっぱい注ぐのだそうだ。ビデオでもそうになっていたのが妙に共感を呼んだということか。

ビデオ視聴後のクラス討論「本当の友人とは？」で明らかになった点は以下の通りである。（討論時間は約三十分）

- ・日常生活を共有することができる。
- ・互いに助け合うことができる。
- ・ことばで言わなくても心が通じる。この部分では日本語の「以心伝心」という言葉が話題となった。国によってはそのような表現がないこともあるけれど、「以心伝心」という現象はどこの国でも多かれ少なかれ見られるという認識で一致した。
- ・楽しい時ばかりでなく、苦しい時に一緒に考えてくれる。
- ・何をやっても理解してくれる。この部分では、そのような存在は家族の中では母親が担う場合が多いけれど、友人に母親的役割を期待できるかという話し合いになり、できるという意見とできないという意見に二分した。
- ・秘密を共有してくれる。
- ・もっとも困った時に助けてくれる。ここでは諺が話題になった。
- ・聞き手になれること。この部分で、他人の話を聞くということが案外、むずかしいものではないかと筆者が問うと、にやにやする留学生が何人かいた。何が聞くことを妨げるか。周囲の雑音、自分の中の声などという意見があがり、自分の中の声とは何かと問うと、自分の考えという答えが返ってきた。人間はいつも自分の意見が絶対と思っているのではないか、そのせいで他の人の

考えは耳に入らないのではないかなどという風に議論が進み、議論は尽くされたと考えた。

- ・悪いこともいいことも言ってくれる人。ここでも諺が登場し、諺の役割を再確認する結果となった。

### 3-4 文献講読1

九州大学の日本事情担当教官が執筆した論文の一部を講読するという形をとった。ふだんはテキストや過去の著名な文献の一部などを読むことはあっても、ごく最近執筆された学術論文などを留学生は目にする機会があまりない。また今回のこの論文は文章が論文調ではなく、日本語の読解力に多少とも不足している留学生でも辞書を使わずに読み流せると判断し、採用した。

内容的にも留学生が友だちになりたいと思っている日本人学生の視点がよく記述されているため、この文献を素材にしてクラス討論が活発に行われた。主な点のみ以下に紹介する。

- ・日本人学生は留学生のことをよく知らない

留学生は何人ぐらいいるのか、何語で話しかければいいのかなどという戸惑い、しかしいったん留学生の日本語を耳にすると、ほとんどの日本人学生が驚くなどといったエピソードを読み、クラスの学生は「そんなことも知らないの」とか「そうそう、いちいち驚く」などと頷く。

- ・日本人学生は留学生と友だちになりたいと思っている

この記述を目にすると早速手があがった。「思っているだけではないですか」「とても本音とは思えない」などという指摘である。日常、友だち作りで苦い体験を重ねてきている留学生にしてみれば、こうした日本人学生の意見表明は信ずるに足らないというわけでもある。

- ・実際に友だちになるのは難しい

ここでは日本人学生の声がたくさん紹介されている。「話が続かなかったらどうしよう」「気軽に声をかけると失礼かなあ」「外国人に対して臆病なのは自分たちも同じ」などと いった声だ。日本人の内面がよく描写されているせいか、留学生は読めば読むほど考えこんでいく。日本人学生は考えすぎるのではないか。いや、自分たちも案外そうかもしれないなどと議論は沸騰する。

その他にも「留学生を特別扱いしてよいのか」「グループの存在が友だち作りを阻害する」「留学生ががんばっている姿は刺激になる」などといった項目ごとにたくさんの意見が紹介されていて、ふだん外側から眺めている日本人学生がそこまで考えているのかとか、何を感じているのかが手にとるようにわかり、留学生はこの文献を通じて次第に日本人の内面をのぞきこんでいくような印象を筆者は受けた。意外なことではあるが、留学生は案外、そういった視点をふだんは持ちにくいのかかもしれないと思った次第である。

### 3-5 課題作文1 提出

ここで、課題作文1「私のかかえている問題」を提出してもらい、各自の友だち作りの問題点を指摘してもらった。個別的問題として、以下のような点が指摘されたことを口頭で伝え、クラス全



体で若干議論をした。その際、提出者が特定されても構わないとする学生は積極的に発言をし、また多少配慮のいる問題（自分の性格論など）については教師の側でなるべく一般論として扱うようにした。プライバシーに配慮しなければならない課題であることを改めて感じさせられた。

- ・中国人の友だちでいい。日本人のことを知りたくない。
- ・挨拶などを交わす表面的な友だちでいい。

もはや、友だち作りについては諦めているという意見。しかし、結論を出すのはまだ早いんじゃないか、自分から戸を閉じてしまったら、もうだめだなどという指摘が他の学生からなされた。

- ・歴史問題が入り込む。日本人論がじゃまをする。

これらの意見は韓国人数名から提出された。韓国での日本事情の授業で日本人論をたくさん勉強してきたが、それがかえって、一人一人の日本人を捉えるじゃまをするという指摘。また韓国で常に問題となる歴史問題も、友だちを作るという観点からするとかえって事態をむずかしくするという意見。

- ・話題が少ない。話題の出し方がわからない。
- ・自分の性格が災いしている。

自分の問題としてとりあげている。自国の人と話すときも感じている問題だと自ら指摘。相手に近づいていくとき、感じのいい、やわらかいものの言い方ができない、自分から話題を探すことができないなどという意見も出る。

- ・はじめは本音を言わず、無理をし、だんだん本音を言うと、離れてしまう。また相手とぶつかりそうになると、自分が引いてしまう。

相手との距離の縮め方についてはいろいろな意見が出された。外国語で行う場合、距離の調整が一層困難だという意見。さまざまな誤解や勘違いが起こるという指摘もあった。

### 3-6 講義：自己開示とステレオタイプについて

予定ではここで各自の問題を一覧表にして問題ごとの解決方法についてグループ討論を行う計画であったが、直前の議論の推移から急遽、この講義を行うことにした。

自己開示についてはテキストを用いて、いわゆるジョハリの窓の話、Barnlund による日米比較、さらに同じBarnlund の作成した自己開示項目について各自作業を行い、作業結果についてグループ内で話し合うという手法をとった。<sup>(注7)</sup> このあたりから、友だち作りも自動的に、受身的にできるものではなく、話題をあれこれと考えるなど自分で努力したり工夫したりすることが、異文化間では特に、多少意識的にでも行わなければだめだという風な捉え方が多く提起されるようになった。

ステレオタイプについては次のような講義を行った。<sup>(注8)</sup>

ステレオタイプとは何か、どんな種類のステレオタイプがあるか、日本人は他国についてどんなステレオタイプを抱いているか、また日本についてはどんなステレオタイプが抱かれてきたか、その歴史的推移、ステレオタイプ形成の原因は何か、ステレオタイプの功罪、さらにはステレオタイプをどう扱うべきか、他国から来た人に対してどのような視点をとるべきか、また他国の人にステ

レオタイプ視された時、どのように対処したらいいかなどといった問題を質疑応答を交えながら行った。ほとんど無意識的に形成されるステレオタイプについて少しでも意識的になることが学習できればよいと考えたが、筆者の思惑がある程度実現できたかどうかはこの授業全体を通じて把握したいと考えている。

### 3-7 最終課題

予定ではここで文献講読2が入り、問題解決の方法についてクラス討論を行うことになっていたが、時間は大きくずれこみ、学期末が目前に控えることになった。そこでやむなく最終課題を課し、評価を行うという方針に変更した。最終課題の内容は以下の通りである。

#### 3-7-1 表の完成

留学生自身が指摘した「友だちができない」原因のリストに基づき、各自がそれぞれの項目について、それは日本人について言えることか、留学生について言えることか、あるいは両方について言えることかを内省し、他の留学生とも話し合っって簡単な見取り図を完成することとした。できあがった表は以下の通りである。

	日本人側	留学生側	両方
外国人の友だちを作りにたくない	6		5
外国人に興味がない	8		4
歴史的・政治的問題にこだわる	1	10	4
日本人論・外国人論にとらわれる	4	3	8
話題が少ない	2	2	12
自分の性格		3	12
本音を言うタイミングをまちがう	1	6	7
自分が引く	2	4	7
表面的な友だちでいいと考える	11		3
ことばがむずかしい・うまく話せない	1	10	5
関係を調整するのが外国語では困難		9	4
価値観がちがう	1		14
はずかしがる	8		5
考えすぎる	8	3	5
自己防衛する	6	1	7

#### 3-7-2 作文課題2

全体の経過を振り返りながら、自分の抱える問題についての解決方法、これまでの実践の経過や、今後の取り組みについて最終的なレポートを完成させた。また予定では教師の作成する友人論リストに基づき読書課題が課されることになっていたが、学習者はこの段階ですでに何らかの読書を始めている者が数名いたため、課題としては特に課さず、すでに読んでいる者については、何かヒントを得たり感銘を受けた場合のみ、作文課題に反映させて記述するように指示を行った。提出され

たレポートには以下に示すようなさまざまなアイデアが示されたが、学習者自身の考察にも明らかな深化が認められる。

若者のことばを学ぶ      ちょっとした贈り物をする      相手のいろいろな面を見る  
相手にその気がなくても本音で話す      開放性・積極性を示す      つきあう時に集中する  
譲り合う      日本のことをよく知っていると思わせる      相手も人間という発見を絶えずする  
一緒にいろいろなことをする      なぞなぞや言葉遊び、ユーモアのセンスをみがく

[学習者の考察]

- ・友だち作りにも努力が必要だ。小さなことを大事にすること。自分はいろいろ心がけている。ちょっとしたことを記憶するとか、言葉を送るとか。また以心伝心ということも大事。相手のちょっとしたふるまいからいろいろなことができる。
- ・これまで相手に気に入られよう、気に入られようとしてきたが、どうもそれでは問題は解決できないと考えるようになった。そのような態度でいると、相手が少しでも自分のことを気に入らないような時、たちまちこちらは怒りや失望を覚える。これは相手にふりまわされているということではないか。
- ・人は他者との関係を通して自分がどんな人間であるかを確認できる。だから友だち作りの得意でない私はこの問題について深く考えていきたい。
- ・異文化の人と親しくなりたい場合は自分の中の、文化とかステレオタイプとかから離れた部分や自分だけが持っていると思う個性をできるだけ早く相手に見せることが必要だ。人は文化の一部分だけれども全部ではないし、自分の全部が特定の文化に所属しているわけでもないからだ。
- ・個人個人が心のドアを閉ざしながら生きている。自己防衛のためだ。ものすごく臆病になっている。でも人間はやっぱり太陽が出ている方が、北風が吹いているところよりも気持ちがいいはずだ。いつでもどこでも笑顔で元気に挨拶を交わして友だちになっていきたい。
- ・どんなに冷たい感じの相手がいても、その雰囲気には飲まれなくて、自分から少しでも声をかけ、相手の気持ちや興味のあるかを探り、自分もいろいろなことを話し、決してあきらめないこと、そうすればきっと友だちはできるはずだ。
- ・日本人と本当の友だちになることが本当の問題ではなく、外国人が外国でどうすればその国の社会に入れるかを考えなければならないと思う。

この他にも生活空間が留学生と日本人学生ではずいぶん異なるのではないかという指摘もあった。留学生の多くが夕方、帰宅後アルバイトに従事している。アルバイトはしばしば深夜まで及ぶ。その後、帰宅してわずかの時間を勉強に費やす。精神的余裕はあまりない。休日の日はふだん以上にアルバイトに追われることもある。日本人学生との時間的接点を持てない。けれどもアルバイト先で多くの若者と友人になれるという指摘もあった。苦しい生活をともにしているという共感のせいか、友だち作りに成功しているケースもあるようである。



また、同世代意識を共有していないという指摘も少数ながらあった。日本人学生の背景にあるのは受験をともに戦ってきたという意識なのではないかという指摘。確かに過去を共有しているという部分も否定はできない。ことに中学から高校卒業までの受験期というのは多くの日本人学生の性格やものの考え方、感じ方に大きな影響を与えている節がある。留学生もまた長い受験生活を経ている者もいるが、背景となる社会状況は少し異なっているかもしれない。

さらに、上記のこととも関係があることだが、筆者は留学生と日本人学生の属するそれぞれの国の発展段階がずれていることも、両者の意識構造に多大な影響を及ぼしているのではないかと思う。留学生の出身国の多くが国作りに懸命である一方、日本はむしろ最近では高度成長期の見直しを迫られている時期にある。こうした時代背景、異なる歴史の時間軸を抱えた留学生と日本人学生の意識の持ち方、勉強に対する態度などが異なるのはむしろ当然の結果と思われる。このことについては留学生自身は特にふれていないが、大人の視点、あるいはより長い時間軸で捉えた場合に浮き出てくる問題なのではないだろうか。

#### 4. 考察と今後の展望

今回の試みは留学生の切実な問題意識に促されてとり組んだものだが、討論や講義、グループ作業などを通じて次第に明らかになっていったのは、友だち作りを困難にしている要因は多種多様であるということ、これまではもっぱら言葉が不自由であるためとか、相手の文化的障壁（ここではたとえば日本人の閉鎖性など）と捉えていたことが、必ずしもそればかりではないことなどに次第に留学生自身が考察を深めていったことである。はじめからそのことを念頭に置いていたわけではなく、むしろクラス全体の揺れ動くムードとともに、自己開示の問題や相手との関係を構築するとはどういうことかという点に関心が移動していった。その点はある程度、評価できると筆者自身は考えている。また、授業終了後の授業評価でも、以下の点について留学生から一定の評価を得た。

- ・日本人のものの考え方について理解を深めた。
- ・異文化の環境に適応する力を高めた。

そしてまた、このような「日本事情」の授業について、実はこの講義は留学生として受講する日本語日本事情科目としては最終的な段階にある科目であるが、学生はさらに勉学を継続したい、自分たちは日本の文化についてもっとたくさん学びたいと記していた点は、日本語日本文化の学習に終わりはないというこの授業の趣旨にも沿っており、目標は達成されたと考えている。

しかしながら、授業担当者としては、「留学生はどうして日本人の友だちができないか」というテーマに十分肉迫しえたとは思っていない。今回の試みの欠陥を以下のように総括し、再度、このテーマに挑戦したいと考えている。

- ・まず第一に全体計画と実際の経過がかなりずれてしまったのはやはり問題がある。時間の予測、テーマの展開をどう予測して課題をどう設定するかなど計画の細部にわたる練り直しが必要であると考え。

- ・第二に、課題学習という設定ではあったが、学習者の最終課題をレポート作成にとどめたのは再検討を要する。成果を編集するなり、口頭発表に持ち込み、日本人学生との討論を実施するなどいくつかのより生産的な手法が考えられる。
- ・文献からの考察が乏しすぎる点も問題である。留学生の読解力の弱さを考慮するあまり、ほんのわずかの文献しか指定しなかったが、再度試みる際は周到な文献読破メニューを用意したいと考えている。その際は速読の手法を導入する必要もあるかもしれない。

以上、課題学習「留学生はどうして日本人の友だちができないか」の授業報告としたい。必ずしも十分な展開ができなかった授業ではあるが、その後、春休みを迎えた留学生の何人かに尋ねてみると、学期中、あれほど友だち作りに絶望していた学生たちだが、なぜか新しい友だちができたという者が少なからずいた。またこの授業を最後に帰国する留学生にも帰国時の大学評価をしてもらったところ、アルバイト先で思わぬ出会いがあり、すばらしい友人ができたことがこの留学の最大の成果だという回答もあった。アルバイト先というところが残念な点ではあるが、この授業の成果がいくらかはあったと考えていいのかどうか迷っているところでもある。

(注)

1. 日本人との交流の問題については以下の文献を参照した。

田中共子「在日留学生の文化的適応とソーシャル・スキル」『異文化間教育』5号 1991

横田雅弘「留学生と日本人学生の親密化に関する研究」『異文化間教育』5号 1991

2. プロジェクト・ワークについては様々な記述が認められる。

バルダン田中幸子ほか『プロジェクト・ワーク』（1988 凡人社）では「プロジェクト・ワークとは、学習者が自分たちで話し合って計画をたて、実際に教室の外で日本語を使ってインタビューや資料集め、情報集めなどの作業を行い、作業の結果をもちよって一つの制作品（報告書、発表、ビデオなど）にまとめる学習活動である」としている。日本語を使った模擬的な授業という意味合いが認められる。

細川英雄「『日本事情』はどのように評価されるか」『21世紀の日本事情』創刊号（1999 くろしお出版）では、「学習者が主体的にテーマを設定し、積極的に活動に参加し、それぞれが協力しあいながら、目的を達成する」ような活動をプロジェクト活動と称し、メールを活用するなど学習者中心の手法を展開している。

本稿での手法は、受講者の多くが理工系学部留学生であること、また帰宅後はアルバイトに追われるなどして、互いに連携するなどの作業には時間をさけないため、教室の中での作業に限定し、また講義などは教師主導型でもあることから、プロジェクト・ワークという方向をめざさなかったが、テーマを設定し、そのテーマを追って授業を展開するという意味で課題学習という言葉を用いた。

3. Kohls, L.R. 『Survival Kit for Overseas Living』（1979 Intercultural Press, INC.） p.96

4. Beebe, S.A. 『Interpersonal Communication』（1996 Allyn and Bacon） p.275

5. NHK国際ナショナル・国際交流基金『留学生ダレスとラーマン』（1994 凡人社）

6. 高松 里「『日本事情』講義を通じた国際理解教育」『九州大学留学生センター紀要』11号（2001） p.18-22

7. 自己開示については以下の文献を参照、利用した。

八代京子ほか『異文化トレーニング』（1998 三修社）

Barnlund D.C. 『Public and Private Self in Japan and the United States』（1975 Intercultural Press, INC.）

8. ステレオタイプの捉え方、演習方法については以下の文献を参照した。

Beebe, S.A. 『Interpersonal Communication』（1996 Allyn and Bacon） p.354

Kohls, L.R. & Knight, J.M. 『Developing Intercultural Awareness』（1994 Intercultural Press, INC.）